

# 兼輔集諸本の再検討 : 西本願寺本の配列を起点として

著者	岸本 理恵
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.89-103
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00017428">http://doi.org/10.24729/00017428</a>

# 兼輔集諸本の再検討

——西本願寺本の配列を起点として——

岸本理恵

## 一、はじめに

藤原兼輔（八七七〜九三三）は、藏人頭、権中納言として醍醐天皇に近侍し、娘桑子は醍醐後宮に入内するなど天皇と密接な関わりがあるだけでなく、醍醐天皇周辺において三条右大臣藤原定方や敦慶親王（醍醐弟）との交流、貫之や躬恒といった専門歌入を庇護するなどの文学的活躍が注目される人物である。その様子は大和物語や後撰集などにも記されている。醍醐朝文学の根幹に関わる存在であり、また曾孫には紫式部があつて後の文学への影響も少なくない。そのような兼輔の家集として複数の系統に分類されるものが現存する。しかし、注釈が刊行されることもなく、諸本系統について殊更に検討を加えられることも少ない。

冷泉家時雨亭文庫の御文庫が公開されるまで、兼輔集は西本願寺本だけが平安・鎌倉期に遡りうる古写本で、ほかは江戸期

のものという状況であつた。その西本願寺本兼輔集は、当初のものではなく平安末から鎌倉初期頃の補写本、それも後に古筆切として切り取られた部分のある残欠本ではあるが、それでも他本に比べて格段に古い書写ゆえに尊重され、信頼されてきた。こうした状況では諸本の比較・分析が困難であつたとも言えるかもしれない。

ところが、一九九五年以降次々と公開された冷泉家時雨亭文庫の兼輔集は、詳細は後に述べるが、書陵部本の親本と判明する伝阿仏尼筆、資経本、坊門局筆本、さらには全く知られていなかった唐草装飾本など、平安末から鎌倉期の注目すべき写本が幾つもあつた。すなわち、兼輔集諸本は平安・鎌倉期の写本が西本願寺本のほかにも、完本として四本が出現し、既に知られていた伝公任筆砂子切や伝貫之筆部類名歌集も存在して、一気に恵まれた残存状況となつた。これを整理すると次に示すようにまとめられる<sup>1)</sup>。

## 第I系統

第一類 西本願寺本三十六人集(128首)

〔影印〕『西本願寺本三十六人集』(書芸文化

新社)ほか

〔翻刻〕『西本願寺本三十六人集精成』

第二類 書陵部本(五一一・二)

〔翻刻〕『新編国歌大観 第三卷』

『新編私家集大成』兼輔I

## 第II系統

第一類 正保版歌仙家集本

第二類 伝阿仏尼筆本(131+21+21首)

↓書陵部本(五〇一・二四五)

〔影印〕『平安私家集九』

〔翻刻〕『新編私家集大成』兼輔II

資經本兼輔集

〔影印〕『資經本私家集一』

↓書陵部本(五〇一・二二)

## 第III系統

部類名歌集本(106首)  
〔影印〕『日本名跡叢刊 堤中納言集』

第IV系統 坊門局筆本(103首) ↓書陵部本(五〇一・七七)

〔翻刻〕『新編私家集大成』兼輔III

〔影印〕『平安私家集三』

〔翻刻〕『新編私家集大成』兼輔IV

第V系統 唐草裝飾本(113首)

〔影印〕『平安私家集七』

〔翻刻〕『新編私家集大成』兼輔V

その他 伝公任筆砂子切

〔影印〕『古筆学大成』

〔翻刻〕『新編私家集大成』解題

冷泉家時雨亭文庫所蔵の写本が叢書として公開されるたびに解題は記されてはいたが、発見を積み重ねる途中段階でのものであった。叢書での発表以降に刊行された辞典類や『新編私家集大成』解題には、冷泉家時雨亭文庫本を含む兼輔集諸本の概要は記されるものの、上記のような恵まれた残存状況の兼輔集にあつてはあまりに概略的である。概要としてではなく詳細な諸本の整理をいまいちどする必要があろう。そこで本稿では、まずは完本として現存し部類本でもない四つの系統からそれぞれ西本願寺本・伝阿仏尼筆本・坊門局筆本・唐草裝飾本の四本

をとりあげ配列について以下に考察を加えることとする。なお、各本を示す際は、必要に応じて系統の番号Ⅰ～Ⅴを名称の前に付けて示し（「Ⅰ西本願寺本」など）、歌番号は、系統の番号Ⅰ～Ⅴを歌番号の前に付して区別する（例えば第Ⅰ系統西本願寺本の30番歌は「Ⅰ30」、第Ⅴ系統唐草裝飾本の15番歌は「Ⅴ15」）。

## 一、兼輔集四種の特徴と配列の対照

本稿に採り上げる四種の兼輔集について、配列の比較に先立って各本の特徴を確認しておくこととする。第Ⅰ系統西本願寺本は、十二世紀前半の西本願寺本三十六人集制作当初のものではなく後の補写本である。その時期は鎌倉初期とも平安末ともされる。後に切り取られて古筆切となり、あるいは散逸してしまつた丁があるため、もとは三〇丁からなる一帖であつたが現在は二二丁の残欠本である。後の補写本ながら、下絵や金銀の箔が施された裝飾料紙が美しい。本稿では欠脱を、影印等が確認できる場合は古筆切によつて補い、散逸して確認できない箇所については、散逸以前の書写とされる醍醐家旧蔵志香須賀文庫蔵本を用いた『西本願寺本三十六人集精成』（久曾神昇・風間書房・一九六六年）による。西本願寺本の歌番号もこれに

よつている。歌数は一二八首。

第Ⅱ系統伝阿仏尼筆本は、雲紙を用いた写本で鎌倉後期の書写とされる。「中納言兼輔集」と外題がある。『新編私家集大成』兼輔Ⅱの底本。歌数は全一七三首。ただし、Ⅱ132～151は「ひんかし」「たつみ」「みなみ」などを詠み込む物名歌で、『患慶集』からの混入。Ⅱ152は兼輔集諸本にも『患慶集』をはじめ他の歌集にも見えない歌。続くⅡ153～173は、Ⅱ153の前に「他本歌」と見出しのあるごとく、他本、特に第Ⅰ系統の兼輔集によつて歌を加えた箇所である。すなわち、第Ⅱ系統の兼輔集としてはⅡ131番までが基幹部分となる。また、伝阿仏尼筆本はこの基幹部分内において重複歌が多い。Ⅱ26～35はⅡ117～127に、Ⅱ78～81はⅡ128～131にそれぞれ本文の異なる箇所はあるものの、同一と認められる歌群が見える。卷末に兼輔の経歴を記すのも特徴である。なお、同系統で鎌倉後期写の資経本は歌数・歌順・卷末の兼輔伝ともに概ね一致する。

第Ⅳ系統坊門局筆本は、俊成監督書写になる坊門局筆三十六人集のうちのも。同三十六人集の元輔集奥書に見える年次（一一七五年）以降で俊成没年（一二〇四年）の頃、坊門局による書写とされる。内題に「かねすけの中納言」とある。『新編私家集大成』兼輔Ⅳの底本。歌数は一〇三首。定方や貴

之など集内に見える他人詠を、詞書のように字下げして兼輔詠とは区別する傾向がある。

第V系統唐草裝飾本は、唐草裝飾本三十六人集のうちの一片で、他に小野小町集など五集が現存する。歌数は一一三首、書写は平安末頃とされる。尾題「兼輔中納言集」に続けて「あやしの人」とあるのは書写者の卑下の言葉かという。他のいづれの兼輔集諸本とも異なる点が多く、該本が公開されるまではこのような集の存在が知られなかった。『新編私家集大成』では旧書籍版にない新たな系統「兼輔V」として翻刻する。

上記の四本の歌は、総歌数としてはII伝阿仏尼筆本が多いものの、重複や混入歌・他本歌を除くとI西本願寺本が最も多いことになる。ただし、I西本願寺本にない他の系統を持つ歌もある。I西本願寺本の歌番号に基づいて【兼輔集諸本歌番号対照表】を本稿末に掲げた。各本とも所々に歌を欠くことはあるが、部分的に区切って見てみると、その範囲内では歌の進行順が西本願寺本とそれぞれに一致し、歌がばらばらに点在するような混乱はない。I西本願寺本と各本の比較を以下にもう少し詳しく見ていこう。

I西本願寺本とII伝阿仏尼筆本基幹部分(II 1~131)を比較すると、×印(IIにない歌)や( )を付した巻末増補歌を除

いて概ね順行する。II伝阿仏尼筆本には重複歌が多く複雑ではあるが、I 62~65とI 72~79は、II伝阿仏尼筆本においてII 26~29・II 30~35とI 73・75を除いて一致し、間のI 66~71を除く形となる。重複箇所にあたるII 117~120・II 121~127と同じ順で見えるし、続いてII 131までがI 87までに順行する。II伝阿仏尼筆本の重複箇所はそれぞれにI西本願寺本と同じ順ということである。I 80~97においても、II伝阿仏尼筆本の重複箇所II 78~93がやはり順行する。異なる点として目立つのは、

① I 21・22・23が、II 54・2・55とある

② I 26・27 (II 58・60)の間に一首(II 59)がある

③ I 53・54・55が、II 17・15・16の順で、前後とは不連続

④ I 97・98はII 93・3と、大きく歌番号が変わる

⑤ I 98~109は、II 3と冒頭付近に位置し、歌順は順行する  
もやや混乱する

の五点がある。ただし④は、II伝阿仏尼筆本はII 3・4と続くので歌群としての区切りと見るべきであろう。この辺りは⑤としたように、異なる箇所之歌が所々に入るので、大きくは順行しながらも両本の間には他の箇所比べてやや混乱がある。総合すれば、幾つかの断絶がありながらも、特定の範囲に区切って見ると部分的には非常に近いものであるといえる。な

お、①く⑤のうち②③④について、次に示すようにIV坊門局筆本やV唐草裝飾本も同じ箇所し断絶をもつし、⑤もV唐草裝飾本と同様の連なりを見せる。

次に、IV坊門局筆本は総歌数が少ないため×印が多いが、概ね順行するようである。所々に前後する箇所として、

⑥ I 2く8はIV 2・9・1・5・7・8・6、I 21く24はIV

63・64・12・4とやや混乱がある

⑦ I 26・27 (IV 23・26) の間に二首 (IV 24・25) があり、

I 25・26がIV 24・23の順

⑧ I 53・54・55が、IV 97・95・96の順で、前後とは不連続

⑨ I 78く128は、IV 54以降の後半部ながら前後する歌が多い

などあるが、I 2く60の間において概ね順行するのはII伝阿仏尼筆本と同様である。ただし、順行の様子はやや異なるし、⑨も含めIV坊門局筆本全体として、構成上の特性も併せてIV系統の配列は考察する必要がある。なお、この⑦⑧は、先の②③と同じ箇所である。

V唐草裝飾本も歌数はやや少なく×印が多いが、次の⑩く⑭を除いてはI西本願寺本の歌順に概ね順行する様相を見せる。

大きく異なる箇所としては、

⑩ I 26・27 (V 39・41) の間に一首 (V 40) がある

⑪ I 53・54・55が、V 12・10・11の順で、前後とは不連続  
⑫ I 76・77を、V 71・72にもち、V 71はV 80に重複する  
⑬ I 97・98はV 98・1と、大きく歌番号が変わる  
⑭ I 98くI 109は、V 1くの冒頭に位置し、歌順は順行するもやや混乱する

の五点がある。このうち⑩⑪は、先の②③・⑦⑧と同じ、⑫はII伝阿仏尼筆本が重複歌としてもつ箇所と重なる。⑬⑭も、II伝阿仏尼筆本で指摘した④⑤と一致する。

こうして見ると四本は、部分的な断絶や独自歌などはそれぞれあるものの、特定の範囲に区切つて比較すると配列は順行する。しかも、I西本願寺本と他本が大きく異なる箇所は、I 53・54・55の歌順が西本願寺本以外の三本は同様に異なる順とされているなど、他の本が互いに共通してもつ特徴であるものも多い。つまりこのことから、四本は全く別種のものではなくて、祖本が共通であったことが知られるのである。書籍版『私家集大成』の解題において久保木哲夫氏が「詞書や形態から考えて、第一系統本と第二系統本はおそらく祖本を同じくしたであろう。それが、脱落・錯簡・混入などをそれぞれくり返して、現存本のように、かなり異同の大きい本文をもたらしただろうと思われる」とし、工藤重矩氏は『新編国歌大観』の解

題で「各系統間の本文の異同はかなり大きいが、同一祖本の想定を妨げるほどではない。配列構成は西本願寺本系統が最も整然としている」としたとおりであるが、これらの指摘はV唐草装飾本が未発見の時のものである。V唐草装飾本が冷泉家時雨亭叢書に収められた際の解題で片桐洋一氏は『兼輔集』諸本のうちではII・IVと通ずる点があるものの、どの本とも異なっている点においてその独自性が評価される」と、本文異同に着目して本文の独自性を指摘した。<sup>(6)</sup>上記のように四系統を総合すると、配列についても第I・第II・第IVの三系統に第V系統の唐草装飾本を加えてもやはり同一の祖本からそれぞれに派生したものであることが確認できる。

### 三、西本願寺本の配列の特徴

さて、このように歌の配列から見ると四つの系統の兼輔集が同一の祖本にたどりうることを確認したからには、祖本と各系統の近さやそれぞれの系統へと別れていく状況が気になるところである。もう少し配列の点から諸本の整理を続けるべく、以下では特に西本願寺本の配列に絞ってもう少し論を進めたい。西本願寺本は一二八首のうちに重複歌を持たず、実質としては歌数をもっとも多い。その配列については既に阿部俊子氏の

論考があるが、<sup>(7)</sup>ここにいまいちど順を追って見てみよう。冒頭は詞書に「正月ついたちに、かれこれあつまれるところにて」とあって、正月一日の歌。続く2は詞書「藤原のさねきが蔵人よりかうぶりたまはりて」とあるので、一般的に叙位としては正月、<sup>(8)</sup>3も詞書「のりゆみのかへりだちのあるじ」とあり、賭弓であるから正月である。4〜9は梅の歌、10は青柳、11〜13は桜をまじえた交野の狩の歌、ここから桜の歌が続き、25〜29は藤花宴の歌である。特に29は、「いたづらにあげばあやなし時鳥鳴を待とて君はとどめむ」と、一泊したことによりほととぎすを待つ季節となった、すなわち春から夏へ移つたことを詠む。贈答歌の間に屏風歌も挟むのは様々な場での詠が混在するように見えて、じつは詠まれた時や素材に基づく正月一日から春の終り、そして夏へと季節の移ろいを意識した配列なのである。続く30〜34はほととぎす、35「うれしくていとどゆくすゑわびしきはあきよりさきのかぜにざりける」と、夏の素材としての扇を詠む中に「秋より先の風」と秋への移ろいを感じさせる歌を配置する。36からは秋の歌となり七月六日の詠、37〜42は七夕。43は「秋萩の下葉の色」を詠み、47は女郎花、49からは時雨が続く。56〜59は菊宴の歌で、56は詞書に「十月ふたつあるとし」とあり58〜59は後撰集に同じ歌が見え、それによれ

ば延喜一三年一〇月の醍醐天皇の菊賀の歌である。36から秋の歌が連続するが、49時雨歌から菊賀のあたりは冬と見るべきかもしれない。ここまで、春以降も四季の移ろいに沿った配列が意識されている。<sup>9)</sup>

61は昔の人を思う歌、62は人に装束を贈る際に添えた歌、63は文を書いて破ることを繰り返す人を見て詠んだ歌と、季節に関わらない日常の詠である。続く64〜88は女との贈答や恋歌の代作が並ぶ、即ち恋の歌と見るべきであろう。90〜97は、但馬の湯に下る際の歌、地方へ行く人へ贈る歌など、羈旅や離別の歌。98〜100は雲晴法師の昇進を祝う。その後、101・102は故式部卿の宮を追悼し、104〜109「親の思ひ」など服喪中の歌が続く。110〜112は醍醐天皇の退位、113〜121は醍醐天皇の崩御とその後の服喪の歌。すなわち、101〜121は哀傷歌群であり、特に110からは醍醐天皇の退位、113は崩御、114〜121は崩御の翌年の正月、119・120はその三月と、時間軸に沿った醍醐天皇への追悼歌群となっている。122〜128は日常詠のようにも見えるが、123は下句「としつもりゆくわれぞかなしき」、125も「われはひたすらおいぞしにける」とあって、嘆老の歌群ともいうべきものがある。

こうして見ると、所々には一見すると前後の歌の季節と合わない場合もないではないが、勅撰集ほどの厳密さではなくとも

詠まれた時や素材を意識した配列となっている。西本願寺本は四季・雑・恋・哀傷・嘆老という部立と、その内部にも時の移ろいを強く意識して配列されているのである。『新編国歌大観』の解題で「配列構成は西本願寺本系統が最も整然としている」と指摘されるように、集内に重複歌もなく完成度の高い家集であるように見える。しかし、果たしてこれが兼輔集として、あるいは兼輔歌の本来の姿を損傷なく伝えていると評価できるかどうかは、もう少し検証の必要があるようである。

西本願寺本101〜103は、次のように故式部卿宮にまつわる哀傷歌が並ぶ。

こしきふ卿すみたまひし四条の宮にて、いまの式部卿  
はしめたまひけるひ、いまのとあるは入道のなり

きみかなもみやもむかしのしかなからかはれるものはとし  
にそありける  
(I 101)

故式部卿宮うせたまへるころ

いまはとてかせまつほとどさくらはなひとのよよりはひさ  
しかりけり  
(I 102)

あしひきのやまへにいまはすみそめのころものそでのひる  
ときもなし  
(I 103)

I 103に詞書はないが、「墨染の衣の袖の干る時もなし」という



のであるから一連の哀傷歌のように見える。しかし、この三首を一連のものとするのは西本願寺本のみで他は異なる箇所に乗せる。各系統の配列に従って掲出して比較してみる（連続しない箇所区切り線を入れている）。

【II 伝阿仏尼筆本】

ふるき式部卿宮、いまの式部卿宮きてものかたりし給けるに、あはれなることゝもありけんかし

君かなも我もむかしのみやなからかはれるものとはしにさりける (II 10)

いまのとあるは入道のなり、おやの思にてまへよりありしをみし人に (II 10)

おやのおもひにて山寺にこもれるに、いつくにそと人のたつねたりける返事に

あしひきのやまへにいまはすみそめのころもそでのひるよしもなし (II 24)

式部卿宮うせ給てのころ、山さとよりさくらの花をさして、三条おとゝ

さきにはふかせまつほどの山さくら人のよゝりはひさしか

りけり

(II 50)

【IV 坊門局筆本】

ふるき式部卿宮にていまのしき部卿宮のものゝたまふにいまのとは入道のにや

きみかなもみやもむかしのしかなからくはれるものとはしにそありける (IV 80)

式部卿、三月はなのさかりにうせたまひにけるに

さきにをひ風まつころの山さくら人のよゝりはひさしかりけり (IV 91)

おもひにて山てらにあるころ

あしひきの山へにいまはすみそめのころもそでのひるときもなし (IV 103)

【V 唐草裝飾本】

ふるきしきふ卿の宮にて、いまのしきふ卿のものしたまひける

きみかなも宮もむかしのしかなからかはれるものとはしに

そありける (V 4)

いまとあるは、入道のなり

あしひきの山辺にいまはすみのえのころものいろのひるよ  
しもなし (V 5)

しきふ卿のみやうせたまひてのころ、山さとよりさく

らのはなにさして 三条のおとゝ

さきにほひかせまつほと山さくらひとのよゝりはひさし

かりけり (V 30)

Ⅱ伝阿仏尼筆本・Ⅳ坊門局筆本では三首をそれぞれ異なる箇所  
に掲載するし、「あしひきの」歌 (Ⅰ103・Ⅱ24・Ⅳ103) には詞  
書「親の思ひにて」「山寺に」(Ⅱ24)とあって式部卿宮とは関  
係がない。しかも、この歌は古今集には詞書を「女のおやお  
もひにて山でらに侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりけ  
れば、返事によめる」(哀傷・八四四・詠人不知)として入集  
する。古今集が作者を読人不知とする点に問題は残るが、詠歌  
状況としてはこちらが本来のものであるらしい。一方、この歌  
に詞書をもたないのはⅤ唐草裝飾本とⅠ西本願寺本である。Ⅴ  
唐草裝飾本ではⅤ4 (Ⅰ101) に続く歌であるのが西本願寺本と  
は異なるし、Ⅴ4の左注「いまとあるは、入道のなり」を挟む

ので、Ⅰ西本願寺本ほどは前の歌との密接さはない。しかも、  
Ⅰ西本願寺本がこの「あしひきの」歌 (Ⅰ103・Ⅴ5) に連続  
させる「いまはとて」歌 (Ⅰ102・Ⅴ30は「さきにほひ」) はⅤ  
唐草裝飾本では全く異なる箇所位置している。こうした四系  
統の状況から類推すれば、本来はこの三首はⅡ伝阿仏尼筆本や  
Ⅳ坊門局筆本のように一連の歌ではなかったのではないか。そ  
れが、Ⅴ唐草裝飾本がⅤ4・5と続けるように「きみかなも」  
(Ⅰ101・Ⅴ4)と「あしひきの」(Ⅰ103・Ⅴ5)が連続すること  
となり、さらにⅠ西本願寺本では「いまはとて」歌 (Ⅰ102・Ⅴ  
30)を詞書の「故式部卿宮うせたまへる」という情報によつ  
て、「きみかなも」歌に連接させたという過程が想定されるの  
ではないかと思う。Ⅴ唐草裝飾本とⅠ西本願寺本がともに「あ  
しひきの」(Ⅰ103・Ⅴ5)に詞書をもたないことに起因する何  
らかの変化がうかがわれる。逆方向の変化を想定すること、つ  
まりⅠ西本願寺本に見る配列から錯簡や整理等によってⅡ伝阿  
仏尼筆本やⅣ坊門局筆本の配列や詞書へと変わったとするのは  
困難なように思われる。すなわち、Ⅰ西本願寺本が最も整然と  
して見えるが、それは整えられた結果としての姿ということであ  
る。この部分は先に各系統の配列の特徴として見た⑤(⑭)に  
も同じ)の内で、Ⅰ西本願寺本とそれ以外とが共通して対立す

る注目すべき箇所にあたる。ただし、Ⅱ伝阿仏尼筆本とⅤ唐草装飾本は「さきにほひ」歌を三条右大臣（定方）の歌とするこ  
とや、系統ごとに全て異なる詞書や歌句をもつさまは複雑であ  
り、単純な諸本系統図を描けるわけではない。

もう一例、Ⅰ西本願寺本76〜78にも同じような状況を推測で  
きる箇所がある。

【Ⅰ西本願寺本】<sup>[1]</sup>

かたゝかへにいきたるところに、まくらをかへすとて  
しきたえの枕にちりのあましかはたちなからにそ人はとは  
まし (Ⅰ76)

返し、女

君かため打はらひつるしきたへの枕のちりにけかれるぬ哉  
(Ⅰ77)

冬の日はなかむるまゝにもくれ竹のよるそわひしきなかき  
思は (Ⅰ78)

Ⅰ西本願寺本が76・77・78と連続させる三首のうちⅠ78「冬の日  
は」歌はⅠ76・77の贈答に連なる内容の歌ではない。詞書の  
脱落とみなすこともできるかもしれないが、他本と比較すると  
そう単純なことでもない様子である。他系統の該当箇所は次  
とおりである。

【Ⅱ伝阿仏尼筆本】

かたゝかへける所に枕いたしたりけるを、かへすとて  
かきつ

しきたへのまくらにちりのあましかはたちかへりにそ人の  
とはまし (Ⅱ32)

かへしをどものへいにける人になりけり

きみかためにうちらはらひつるしきたへのまくらのちりにけ  
かれぬるかな (Ⅱ33)

女に

ふゆの日はなかむるよにもくれ竹のふしそわひしきしけき  
なけ木は (Ⅱ34)

かたゝかへるところにまくらいたしたるに

しきたへのまくらにちりのあましかはかたかへり人はとま  
らし (Ⅱ124)

かへし、おさなき人のくにへいきけるに

きみかためうちはらひつるしきたへのまくらのちりにけか  
れぬるかな (Ⅱ125)

ふゆのよはなかるゝまにもくれ竹のよるそわひしきしけき  
なけきは (Ⅱ126)

【IV坊門局筆本】

(ことはなきうた)

冬の日はなかくむるまにもくれたけのよるそわひしきしけき

おもひは

(IV 67)

【V唐草裝飾本】

しきたえのまくらにちりのみましかはたちかへりてそひと

はとはまし

(V 71)

かへし、をとこのものへいにけるいへなりけり

きみかためうちはらひたるしきたえまくら ちりにけか

れたるかな

(V 72)

かたゝかへしてはへるところに、まくらをいたした  
る、かへすとて

しきたえのまくらにちりのみましかはたちかへりてそ人は

とはまし

(V 80)

をんな

ふゆのひのなかむるまにもくれたけの夜ゝにわひしきしけ

きなけきは

(V 81)

II 伝阿仏尼筆本は集内の重複箇所にあたり、この三首の連続

を二箇所にもつ。そのうちのII 124～126では三首目「ふゆのよ  
は」歌に詞書がないのが西本願寺本と一致する。しかし二首目  
II 125「きみかため」歌の詞書はI 77と大きく異なるし、その他  
の歌句にも異同は大きい。V 唐草裝飾本にはII 伝阿仏尼筆本ほ  
どの集内重複歌はないが、この「しきたえの」歌が唯一の重複  
歌で、V 71とV 80という近い位置に見える。V 71には詞書がな  
いのは何らかの損傷があると見るべきかもしれないが、とすれ  
ばなおさら、この二首は重複しているのが兼輔集として未整理  
の形、言い換えれば、I 西本願寺本が重複しないのは、重複を  
整理した結果ということではなからうか。推測に推測を重ねる  
なら、V 唐草裝飾本の三首連続で重複するのではなく「しきた  
へ」の歌一首のみが近接箇所に重複し、しかもV 71の詞書がな  
いという状態は、II 伝阿仏尼筆本のように贈答が二箇所に重複  
していたものから重複を整えようとする過程が見えているとい  
うことがあるかもしれないが、推測が過ぎるのでこれ以上は詮  
索せず今は置いておく。I 西本願寺本が重複を整理したとすれ  
ば、I 78に詞書がないのはII 124～126のような連続があつた痕跡  
を残しているものではないか。そして、I 77の詞書が他本と比  
べて短いのはそうした整理に伴って詞書も簡潔に整えられるこ  
とがあつたのかもしれない。

もう一例、次の I 34～38 を指摘しておく。

平のなかきかはりまよりのほりて、さはることありて  
いまゝてまいらぬといひたる返事に

時鳥鳴まふさとのしけゝれば山辺に声のせぬもことはり

(I 34)

おとこのもとよりあふぎえたる女にかはりて

うれしくていとゝゆくすゑわひしきはあきよりさきのかせ  
にさりける

(I 35)

七月六日

いつしかとまたくこゝろをはきにあげてあまのかはらをけ  
ふやわたらん

(I 36)

七月、殿上、これかれうたよむに

たなはたをわたしてのちはあまのかはなみたかきまでかせ  
もふかなむ

(I 37)

こひわたるたなはたつめにあらはこそけふしも人にあはむ  
と思はめ

(I 38)

これは、かのさはることありてと云たりしなかきか、あ  
りゝて七日きたりければ、うちさふらひにていひいた  
したりける

配列については I 36 を II 伝阿仏尼筆本と V 唐草裝飾本が持たな

いが IV 34 には見えるという問題がある。しかしここで注目して  
おきたいのは傍線を付した箇所である。I 38 の左注「かのさは  
ることありてと云たりしなかき」とは、I 34 詞書に見える「平  
のなかき」が「さはることありていまゝてまいらぬ」を受ける  
のであろう。I 34 詞書の「なかき」が色々あつたけれど七月七  
日来たという説明として I 38 左注は読める。しかし、この部  
分、I 34 は他本も詞書の内容に差はないが、I 38 は、西本願寺  
本は I 37 に連続する形で詞書がなく左注をもち、諸本は左注が  
なくて詞書が次のようにある。

II 69 ありゝて、七日、きたりける人にいひいたす

IV 37 ありゝて、七日にきたる人にいひいたす

V 51 ありゝて、七日、きたるひにいひいたす

II・IV・V とも内容はほぼ同じ、すなわち I 西本願寺本にある  
「なかき」の名や I 34 (II 66・IV 32・V 48) とのつながりが全  
くない。一首前 (I 37・II 68・IV 36・V 50) とも接続しない。  
先に見てきた I 西本願寺本が配列を整える傾向からすると、こ  
こも I 38 を殿上での七夕詠として I 37 とまとめ、本来は他本に  
あるような詞書「ありありて」などの語を用いながら、人物を  
左注に明記したように見える。

上記の二箇所配列や左注の問題は、一見すると I 西本願寺

本の正統性を示しているようであつて、じつは西本願寺本に手が入っている様子をうかがわせる。兼輔の私家集としては、整然として完成度の高いものとなつてはいるが、それは整えられた結果ということであるらしい。

#### 四、おわりに

以上、兼輔集諸本について四つの系統を配列の点から整理を試みた。I 西本願寺本を基準として見た場合は、和歌は詠まれた時や素材に着目して勅撰集のような部立、時の移ろいを意識した配列となつていた。他の三系統も断片的には共通するもので、四系統は粗本を同一とすると見ることが出来る。西本願寺本以外の三系統が断片的にのみ西本願寺本と配列を同じくする状態は、それぞれの家集としては同一の季節や題材が複数箇所にあることとなつて西本願寺本ほどの完成度はないし、かといつてそれぞれが独立して全く別の家集としての構成をもつた配列を見せるといふわけでもない。阿部俊子氏が、本稿でいうところの第II・IV系統について、西本願寺本との比較から、「部分的な錯乱はあるけれども、全面的に類別の方針を崩し去つて別の形にまとめようとした意図はうかがえず」と先引の論文で述べるとおりである。とすれば、西本願寺本が兼輔集の共

通祖本にもっとも近く、他はそれぞれ錯簡または再構成などの手が入つたものと考えるのが自然であるようにみえる。けれども先に見た例から、整然として完成度の高い、言い換えれば損傷の少ないように見える西本願寺本は、じつは配列の点で整理された状態であることが確認され、それが本文にも及ぶ可能性もあつた。

そして、片桐洋一氏は唐草裝飾本の本文の独自性を「意解などによる改訂を経していない」「当初性」を保持しているらしい」と指摘する。逆に言えば、本文において西本願寺本等は「当初性」を保持せず整えられたものということになる。配列とあわせて検討する必要がある問題である。兼輔集の諸本間の本文異同は多く、歌句そのものも変わつていようような大きな異同も少なくない。そのため兼輔集諸本の本文異同について本稿では扱わず、一旦は配列に絞つて論じた。本文異同については別稿を予定している。

(注)

- (1) ここに示した分類は、『新編私家集大成』「兼輔」解題(書籍版は久保木哲夫、新編補遺は片桐洋一・藤川晶子)に基づく。  
『新編国歌大観』第三卷「兼輔集」解題(上藤重矩)や、片桐洋一・田中登「冷泉家時雨亭文庫蔵平安私家集系統一覧」(冷

泉家時雨亭叢書『平安私家集十二』朝日新聞社・二〇〇八年）は、それぞれ異なる系統分けをしている。

(2) 小松茂美『古筆学大成』「伝寂蓮筆本願寺本兼輔集切」に復元の詳細がある。

(3) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集九』（朝日新聞社・二〇〇二年）、解題は片桐洋一。

(4) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集三』（朝日新聞社・一九九五年）、解題は片桐洋一。

(5) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集七』（朝日新聞社・一九九九年）、解題は片桐洋一。

(6) 久保木哲夫氏・工藤重矩氏の論は注1、片桐洋一氏は注5による。

(7) 阿部俊子「中納言兼輔集雑考」(『国語と国文学』47-7・一九七〇年七月)

(8) 田中直『中納言兼輔集』私注(一)、『東京都立桜水商業高等学校校紀要』11・一九八七年二月)は、「藤原さねき」なる人物について二説を紹介する。藤原真材とすれば叙位は延喜一〇年正月であるが、藤原真興とすれば延喜一三年一二月となる。ただし、「さねき」なる人物の実際のできごととしての年月と、家集の配列上の素材としての叙位が何月であるかということは別問題として考えるべきかもしれない。

(9) 注8 田中論文は1番歌について「以下、84まで、厳密ではないにせよ四季歌的な配列姿勢がうかがわれ、巻頭歌としてこの元日詠が配されているのである」とする。冒頭に元日の歌があるのは、意識的に配したものであるという指摘や四季を意識した配列についてはご指摘のとおりである。ただし、四季詠は84番ではなく60番歌までで、続きは雑や恋・哀傷など

と見るべきであろう。

(10) 「いまのとあるは入道のなり」はII 10の左注、「おやの思にてまへよりありしをみし人に」は続くII 11の詞書であるが、II 伝阿仏尼筆本も同系統の資経本も、この二文を区切ったり區別したりすることなく、左注のような字下げはせずII 11の詞書であるかのように続けて書く。

(11) この部分は西本願寺本の散逸箇所、醍醐本によった箇所である。

(12) ただし、阿部氏は本稿でいうI・II・III・IVの四系統を「それぞれに歌の素材内容、よまれた場等から整理して類別的にまとめられようとした家集ということができるとして、独自に類纂された集という見方をしておられる。

(きしもと りえ・関西大学准教授)

【兼輔集諸本歌番号対照表】

- ・Ⅰ西本願寺本の歌について、Ⅱ伝阿仏尼筆本・Ⅳ坊門局筆本・Ⅴ唐草装飾の歌番号を一覧にした
- ・「×」印はその歌がないことを示す
- ・歌番号は、西本願寺本は久曾神昇『西本願寺本三十六人集精成』、他は新編私家集大成のものである
- ・Ⅱ伝阿仏尼筆本132、Ⅲ伝阿仏尼筆本132、Ⅳ伝阿仏尼筆本132、Ⅴ伝阿仏尼筆本132番の『恵慶集』からの混入歌は省略した
- ・Ⅱ伝阿仏尼筆本153、Ⅲ伝阿仏尼筆本153、Ⅳ伝阿仏尼筆本153番の他本からの増補歌は、( ) を付けて番号を掲載した

V	IV	II	I
唐草装飾本	坊門局筆本	伝阿仏尼筆本	西本願寺本
×	3	1	1
15	2	20	2
16	9	36	3
×	1	(153)	4
17	5	37	5
18	7	38	6
19	8	39	7
20	6	40	8
21	10	41	9
22	11	42	10
23	13	43	11
24	14	44	12
25	15	45	13
31	18	51	14
26	16	46	15
27	17	47	16
28	19	48	17
29	20	49	18
32	21	52	19
33	22	53	20
34	63	54	21
35	64	2	22
36	12	55	23
37	4	56	24
38	24	57	25
39	23	58	26
41	26	60	27
42	27	(154)	28
43	×	61	29
46	30	64	30
44	28	62	31
45	29	63	32
47	31	65	33
48	32	66	34
49	×	67	35
×	34	(155)	36
50	36	68	37
51	37	69	38
52	35	(156)	39
53	38	70	40
×	×	(157)	41
54	39	71	42
55	40	72	43
56	43	73	44
×	×	×	45
×	×	(158)	46
57	41	74	47
58	44	75	48
59	×	76	49
60	51	77	50

V	IV	II	I
唐草装飾本	坊門局筆本	伝阿仏尼筆本	西本願寺本
×	65	(159)	51
61	45	109	52
12	97	17	53
10	95	15	54
11	96	16	55
62	53	110	56
63	46	111	57
×	×	(160)	58
×	48	×	59
64	50	112	60
×	×	(161)	61
70	×	26・117	62
74	×	27・118	63
75	×	28・119	64
76	×	29・120	65
×	×	6	66
×	68	7	67
×	69	×	68
×	×	8	69
×	70	9	70
×	×	(163)	71
77	72	30・121	72
×	×	(164)	73
78	75	31・122	74
79	76	123	75
71・80	×	32・124	76
72	×	33・125	77
81	67	34・126	78
82	54	35・127	79
83	×	78・128	80
84	×	79・129	81
×	×	(165)	82
×	×	(166)	83
×	×	(167)	84
×	×	(168)	85
85	×	80・130	86
86	71	81・131	87
87	×	82	88
88	×	83	89
×	×	(169)	90
89	×	84	91
94	84	89	92
95	87	90	93
96	×	91	94
97	85	92	95
×	×	(170)	96
98	×	93	97
1	81	3	98
2	59	4	99
3	60	5	100

V	IV	II	I
唐草装飾本	坊門局筆本	伝阿仏尼筆本	西本願寺本
4	80	9	101
30	91	50・(171)	102
5	103	24	103
6	92	11	104
7	100	12	105
8	93	13	106
9	94	14	107
13	98	18	108
14	99	19	109
×	×	(172)	110
×	×	×	111
×	×	×	112
99	×	95	113
102	×	97	114
103	90	98	115
104	×	99	116
100	88	94	117
101	89	96	118
105	×	100	119
106	×	101	120
107	×	102	121
108	×	103	122
109	×	104	123
113	×	108	124
×	×	×	125
110	×	105	126
111	77	106	127
112	79	107	128